

相対主義者への説得と強制

—アリストテレス『形而上学』Γ巻5-6章の論証戦略—

杉本 英太

万物の尺度は人間である。あるものどもについては、あることの。ありはしないものどもについては、ありはしないことの。(DK 80 B1=LM PROT. D9)

プロタゴラスが以上の標語で言い表した人間尺度説は、古来多様な解釈と論争を呼んできた。プラトン、アリストテレス、セクストスの議論は古代の理論的受容の代表例である。彼らのテキストは興味深くも複雑な理路を辿っており、それ自体もまた現代に至るまで多様な解釈——いわば解釈の解釈——を受けてきた。

現在主流の理解によれば、古代のプロタゴラス受容史上、彼に帰属される人間尺度説の定式化は、アリストテレス『形而上学』Γ巻において微妙ながら決定的な変質を示している。すなわち、プラトンが『テアイテトス』において人間尺度説を相対主義的に解釈したのに対して、アリストテレスは主体に対する相対性を捨象し、「全ての現れが(端的に)真である」という、後の古代世界で主流となる定式化を行ったとされる¹。この定式化は今日「不可謬主義」と呼ばれる²。

こうした理解はしばしば一種の頹落史観の色彩を帯びる。不可謬主義は、相反する現れが存在するという常識的前提のもとで直接矛盾を引き起こすため、往々にして相対主義に比べて内容上の興味に乏しいとみなされるのである。結果として、アリストテレスの再定式化は立場の矮小化であると評価されることになる³。

これに対して若干の論者は、主流派解釈のプラトン例外論を批判し、すでにプラトンにおいて人間尺度説は不可謬主義的に定式化されていると論じる⁴。この立場によれば、そもそも古代においてプロタゴラスの相対主義的解釈は存在しない。

本稿はアリストテレス『形而上学』Γ巻5-6章の読解を通じて、これら従来の諸解釈が見逃してきた点を明らかにする。第一に、アリストテレスは同箇所で一貫して相対主義を批判する議論を行っている。第二に、それにも拘らず不可謬主義的定式化が登場していることは、アリストテレスの手落ちではなく、むしろ彼の採る巧妙な論証戦略の帰結である。本稿は以上二点の論証を通じて、古代において人間尺度説が一貫して不可謬主義として受容されてきたという見解に反駁する

とともに、主流派解釈に含まれるアリストテレスの議論の過小評価を修正する。

本稿は5節からなる。1節では、Γ巻における人間尺度説が不可謬主義と形而上学的相対性という二側面をもつことを示す。2節では説得と強制という二つの論証戦略を再構成し、3節ではその再構成がΓ巻5章の構造を適切に説明することを確認する。4節と5節では説得と強制の適用場面をそれぞれ検討し、人間尺度説の上述の二側面が、これら二つの論証戦略と正確に対応することを示す。

1. 相対主義・不可謬主義・相対性

はじめに、相対主義と不可謬主義と呼ばれるものを明示的に特徴づけ、両者が一見相容れない仕方で『形而上学』Γ巻に登場することを確認する。本稿が「相対主義」と呼ぶのは、主流派解釈が『テアイテトス』に見出すのと同じ立場である。

(相対主義) AにPであると現れる \Leftrightarrow PはAにとって真である。

例えば、同じ風を太郎は冷たく感じ、花子は暖かく感じるとする。このとき相対主義によれば、風が冷たいということが太郎にとって真であり、風が冷たくないということが花子にとって真である (cf. *Tht.* 152a-b)。これら二つの命題は、「誰それにとって」という限定句が存在するおかげで、直接の矛盾を免れている。

他方、アリストテレス『形而上学』Γ巻5章冒頭における「プロタゴラスの説」(ὁ Πρωταγόρου λόγος) の定式化は、これとは異なる主張内容をもつ。

[...] 判断されていること、すなわち現れの全てが真であるのなら、全てが同時に真かつ偽であることは必然である。(Metaph. Γ5, 1009a7-9⁵)

この一文は現代の論者が「不可謬主義」(infallibilism) と呼ぶ立場を示している。

(不可謬主義) AにPであると現れる \Leftrightarrow Pは真である。

不可謬主義は右辺に「Aにとって」という限定句を付さない点で相対主義と異なる。それゆえ、花子がPと感じ、太郎がPでないと感じた場合、不可謬主義によればPと¬Pがともに真だということになり、矛盾した事態が成立してしまう。

矛盾を容易に引き起こすという不可謬主義の特徴は、アリストテレスの論脈に

においては重要である。『形而上学』Γ巻後半部の目標の一つは第一哲学の原理としての無矛盾律の擁護であり、アリストテレスは無矛盾律に対立する立場としてこの学説を取り上げているからである。後代の間人尺度説理解に対してこうした不可謬主義的定式化が大きな影響力を持ったことは、セクストスの著作などから跡づけることができる(e.g. S.E. M. 7.389-90. DK 80 A15=LM PROT. R22)⁶。

だが、アリストテレスは必ずしもプロタゴラス説を不可謬主義としてのみ扱っているわけではない。彼はΓ巻6章において、いくぶんプラトンの言葉づかいを選びながら、以下のようにも述べている。

[a] もし全てが何かに対する(πρός τι)ものなのではなく、むしろ若干のものがそれ自体に即して(αὐτὰ καθ' αὐτά)もあるのなら、[b] 全ての現れが真であるということとはありえない。[c] というのも、現れは誰かにとっての現れだから。[d] したがって、全ての現れが真であると述べる人は、全ての〈あるもの〉どもを何かに対するものにしてている。(Metaph. Γ6, 1011a17-20)

アリストテレスはここで不可謬主義者に次の主張を帰属しているように見える。

(相対性) x が ϕ であるとき、ある y が存在し、 x は y と相対的に ϕ である。

アリストテレスの術語で言えば、これは万物が関係カテゴリーに属するという主張である。この箇所の論証の再構成は解釈者を悩ませてきたが⁷、少なくとも外形上、[a] 相対性の否定から [b] 人間尺度説の否定を導き、帰謬法によって(つまり矛盾を避ける仕方) [d] 相対性が結論されていることは見て取れる。また [c] から読み取れるように、ここで特に問題になっているのは、「AにPと現れる」というときの人間A(現れの主体)に対する相対性である。したがって、不可謬主義者に課される実質的な制約は、次のようなものだと言える。

(主体相対性) x が ϕ であるとき、 x は現れの主体に相対的に ϕ である。

不可謬主義は、何か(真で)あることの内実に関するこうした制約のもとで再解釈するなら、相対主義と区別がつかなくなる⁸。

とはいえ、(主体)相対性の導入によって生じるのは、不可謬主義の補強というよりは、むしろ改鑄である。不可謬主義が矛盾する事態を導く主張として導入さ

れていたのに対して、相対性を導入する眼目は矛盾の回避にある。相対性の導入は「(真で) ある」の意味内容自体の変質をもたらす。ゆえに、相対性を不可謬主義と連言で結ぶことは意味をなさない。結果として、アリストテレスの批判対象である「全ての現れが真であると述べる人」も、単一の整合的な像を結びえない。

後代の著作家は相対性に関する形而上学的テーゼと不可謬主義的人間尺度説をともにプロタゴラスに帰属する一方で、両者をそれぞれ別個に扱った⁹。そうした扱いは両者の異質性の当然の帰結と言えるだろう。問題はむしろ、なぜアリストテレスはそうした異質な立場をひとまとめに扱っているのかということである。

2. 議論の二つの戦略：説得と強制

前節の問いに対する本稿の解答は、一言で言えば次の通りである。不可謬主義と相対性という相容れない二要素の登場は、相対主義に対する二つの異なる戦略の帰結である。そのうち第一の戦略は彼が「説得」と呼ぶものであり、この特殊な文脈において相対主義は不可謬主義と等価である。第二の戦略は「強制」であり、そこでアリストテレスは相対主義の理論的難点を相対性に見定めている。

本節では、説得と強制という二つの戦略の導入部を検討し、Γ 卷における無矛盾律論の要約箇所との対比を通じて、戦略の内実についての解釈案を提示する。

説得と強制という二つの戦略の区別は、Γ 卷 5 章の序盤に登場する。

他方で、全ての人々に対して、応対という同一のやり方があるわけではない。というのも、或る人々は説得 (πειθοῦς) を必要とし、或る人々は強制 (βίας) を必要とするから。すなわち、一方でアポリアに陥ったことから (ἐκ τοῦ ἀπορῆσαι) このように想定した限りの人々の無知は治療しやすいが(彼らへの応答は、言論に対してではなく、思考に対するものだから)、他方で論のために論じる (λόγου χάριν λέγουσι) 限りの人々の論駁は¹⁰、音声における言葉と名辞における言葉の治療である。(Metaph. Γ5, 1009a16-22)

この一節は不可謬主義と「全てが同時に真かつ偽である」という立場(矛盾主義)の同値性を示す議論の直後に位置し、文中の「このように想定した」とは矛盾主義の受容を指す。したがってこの箇所は、以下のように部分的にパラフレーズできる——アポリアに陥って矛盾主義を受け入れてしまった人々に対しては、当のアポリアを解消すれば、矛盾主義へのコミットメントも解消できる。他方で

「論のために論じる」人々に対しては、言葉の上で反駁しなければならない。

だが、以上の対比によって念頭に置かれている方法論は、なお不明瞭である。この箇所を含め、アリストテレスは「説得」と「強制」を明確に定義していない。両語句の対比はアドホックであり、著作集の他の箇所には見られない。ゆえに、区別の内実は、実際の論証構造から逆算する形で明らかにする必要がある。

本稿の提案する解釈では、Γ 卷 6 章の末尾における無矛盾律論の要約と重ね合わせることで、対比の内容をより明瞭に把握できる。この一文は従来さほど注目されてこなかったが、無矛盾律論全体の議論構成を重要な仕方の特徴づけている。

[a] 「対立する言表は同時に真でありはしない」というのがあらゆる考えのなかで最も強固な考えであること、[b] およびそのように語る人々に何が帰結するか、[c] また何ゆえに (διὰ τί) そのように語るのか——これだけのことは語られたものとしよう。(Metaph. Γ6, 1011b13-15)

[a] が言及する無矛盾律の認識論的地位は Γ 卷 3 章の論題である。問題は [b] および [c] がどの箇所のいかなる議論を指すかである。まず [c] の「何ゆえにそのように語るのか」を問う議論は、動機となる考えを問うていると解釈するなら、上記の「説得」と同定できる。後述の通り、この議論のモードは Γ 卷 5 章から 6 章冒頭まで一貫しており、また主張と背景にある思考の関係はしばしば「～ゆえに」(διὰ+対格, διό) 「～から」(ἐκ) といった表現で示される¹¹。ゆえに、残る [b] が「強制」に対応し、また無矛盾律論の残る箇所に対応するという仮説が立つ¹²。

つづいて内容を検討すると、[b] と [c] はいわば逆向きの視点を示している。すなわち、[b] は矛盾主義の帰結に、[c] は前提に着目しているのである。これら二つの視点は、対話的文脈における論駁一般の興味深い大分類を与えうる。すなわち、ある人の主張 P を論駁するやり方としては、P を帰結にもつ諸前提を批判する方法と、P から帰結する様々な結論を批判する方法の二通りが考えられる。両者には、対象とする命題だけでなく、議論の手続き自体に大きな違いがある。

第一の方法において批判対象となる P の前提は、P の十分条件であれば何でもよいわけではなく、P の主張者が P だと現に信じる理由や主張する理由でなければならない¹³。逆にそうでありさえすれば、当の命題は必ずしも P を論理的に含意する必要はないし、原則的には客観的によい理由である必要さえない。また P を主張する人が当の命題を明示的に述べているとも限らない。こうした意味で、検討すべき前提は P を主張する特定の人間の思考に存し、言論には存しない。

他方で、帰結を扱う第二の方法はより単純であり、P の論理的帰結でありさえすれば、批判者は何を批判してもよい。つまり、P の内容が特定できれば、批判者は主張者の思考、就中 P を支持する理由を参照しなくてよい。主張者が何を考えていようと、P から帰結する命題を論駁できれば P 自体を論駁できるからである。

このように分類するとき、[b] は矛盾主義者に対して第二の方法を適用した議論にあたり、[c] は第一の方法を適用した議論にあたりと理解できる。そして両者の特徴は、先述の「説得」と「強制」の方法の特徴とよく符合する。すなわち、説得は相手の言論ではなく思考を直接の対象とし、強制は思考ではなく言論を直接の対象とする。説得の方法を適用すべき状況において、対話相手にとってのアポリアとなるのは、命題 P がいかに常識に反していようと、P の一見よい理由となる前提 Q を認める限り、P が正しいと考えざるを得ないという事情である。Q の誤りを批判者が示せば、対話相手の P へのコミットメントは解消できる。

したがって、「説得」と「強制」の対比が 6 章の要約部で繰り返されているとすれば、両者のより明確な特徴づけが可能である。すなわち、説得とは信念間の動機づけ関係に着目する方法であり、強制とは命題間の論理的関係に着目する方法だとみなしうる。以下では、実際の行論との整合性から、この解釈を確証する。

3. 『形而上学』 「巻 5 章の論証構造

議論の形式に関する前節の分析を踏まえると、不可謬主義を扱う Γ 巻 5 章の構成と全体的な目標はよりよく理解できる。同章の議論は、方法論的な箇所や議論の重複する箇所を除けば、以下のようにまとめられる。

- (1) 矛盾主義と不可謬主義は同値である (1009a6-16)。
- (2) 「〈あるもの〉とは感覚対象である」という見解 (感覚対象一元論) は矛盾主義の動機となるが (1009a22-30)、実際には根拠にならない (1009a30-38)。
- (3) 感覚対象一元論は不可謬主義の動機となる (1009a38-b33)。
- (4) 矛盾主義や不可謬主義からは哲学の不可能性が帰結する (1009b33-1010a1)。
- (5) 感覚対象一元論は流動説の動機となる (1010a7-15)。
- (6) だが感覚対象一元論は実際には流動説を採る根拠にならない (1010a15-b1)。
- (7) また感覚対象一元論は不可謬主義を採る根拠にもならない (1010b1-30)。
- (8) また感覚対象一元論自体が成り立たない (1010b30-1011a2)。

ここに登場するのは、矛盾主義、不可謬主義、流動説、感覚対象一元論という四つの立場である。このうち最後の感覚対象一元論が、残りの三者を動機づけるとされる。議論は基本的に「説得」の方式である¹⁴。すなわち、人々が誤った学説を受け入れる背景として感覚対象一元論を特定し、両者の関係づけの批判を通じてアポリアを解消するという手順で進む。5章の議論は、三つの説に対してこうした手順を反復し、最後に感覚対象一元論自体を斥けるという構成を取る。

しかしながら、無矛盾律論という脈絡のもとで捉えるとき、この構成の眼目は必ずしも明らかではない。無矛盾律を説得によって擁護するためには、矛盾主義とその背景をなす感覚対象一元論を斥ければ充分であり、矛盾主義と同列に位置する不可謬主義や流動説への言及は不要であるように思われるからである。

5章冒頭で示される矛盾主義と不可謬主義の同値性は、この疑問に対する部分的な解答にはなるだろう。不可謬主義から矛盾主義が帰結するなら、不可謬主義の批判は矛盾主義に至る重要な理路の一つを塞ぐことになるからである。だが、流動説については同様の説明はできない。アリストテレスは矛盾主義と流動説の一方が他方を含意するとは論じていないからである。それどころか、流動説批判の最後に置かれた以下の一節は、矛盾主義と流動説の両立不可能性を示している。

しかし、同時にありかつあらぬと主張する人々は、全てが運動するよりむしろ静止していると主張することになる。ものが変化する先がないから。というのも、全てが全てに帰属するからだ。(Metaph. Γ5, 1010a35-1010b1)

多くの解釈者は、この箇所を直前の流動説批判と一続きに読み、流動説論者が同時に矛盾主義にも与していると想定した上で、矛盾主義から全静止説が帰結するという対人論証的な論駁がなされていると理解する¹⁵。だが、流動説論者が矛盾主義に与すべき理由はなんら明らかではない。むしろ、アリストテレスは流動説が矛盾主義と全く別の立場であると考えており、ここではその区別が確認されると理解するのが自然である¹⁶。そうした確認が有用なのは、一部の人々が矛盾主義を現にヘラクレイトスに帰してきたからである (cf. Metaph. Γ3, 1005b23-25)。

しかしそうだとすれば、流動説そのものが詳しく論じられている理由はなおさら説明を要する。もちろん、やや外在的な理由として、アリストテレスが参考にした『テアイテトス』がそもそもプロタゴラス説と流動説を結びつけていたことは指摘できる¹⁷。両著作の構成面の並行性は明白である。すなわち『テアイテトス』におけるソクラテスの議論が、「知識は感覚である」というテアイテトスの第一定

義を人間尺度説になぞらえた上で、流動説を含む「秘密の教説」という形而上学的背景を補う、という仕方進むのに対し、Γ 卷 5 章はテアイテトスの定義のいわば形而上学的対応物である「〈あるもの〉は感覚対象である」というテーゼを人間尺度説と流動説の背景に据えている¹⁸。それゆえ、プラトンの議論に親しんでいる読者・聴講者に対して、アリストテレス自身の学説誌的整理における流動説の位置づけを明示することには、一定の意義があったはずである。

だが、論証戦略についての本稿の解釈に基づくなら、より実質的な説明も可能である。Γ 卷 5 章の説得の方法は、信念間の動機づけ関係に着目する方法であった。そして、ある論理的帰結関係からその逆向きの帰結関係は得られないのに対し、一定の動機づけ関係は逆向きの動機づけ関係の基礎となりうる。例えば感覚対象一元論に動機づけられて一定の立場（不可謬主義や流動説）を信じるに至った場合、それらの信念が今度は反対に感覚対象一元論を動機づけることがありうる。信念はしばしば相互依存的で全体論的なネットワークをなすからである。

こうした描像はアリストテレス自身の議論からも支持される。彼の知識論の基本的な枠組みでは、ある事象を知るとは、事象の原因を前提とし当の事象を結論とする論証をもつことである。だが、『分析論後書』1 卷 13 章は、これとは逆向きの知識のあり方を認めている (APo. 1.13, 78a22-b11)。すなわち、上記の「何ゆえに」(τὸ διότι) の知識とは逆に、「私たちによりよく認識される」事実を前提して原因を示す場合、私たちは「そうあること」(τὸ ὅτι) の知識をもつとされる。そして、後者の知識のあり方を原因把握の健全なプロセスとして認めてよいとすれば、「何ゆえに」の知識を得るまでに循環的な正当化がはたらきうることになる¹⁹。

それゆえ、矛盾主義者を説得する際にも、矛盾主義を直接動機づける感覚対象一元論だけでなく、それらと相互に緩やかに関連する複数の信念を定式化した上で、信念群全体を解体するのが効果的である。この意味で、『形而上学』Γ 卷 5 章の学説誌的論述形式そのものも、説得という方法の帰結と見なすことができる。

とはいえ、相互的な動機づけ関係の間にも先行関係は存在する。矛盾主義を含む信念群の場合、初発の動機はあくまで感覚対象一元論である。したがって、感覚対象一元論まで遡った上で、そこを起点とする動機づけ関係を切り崩すというアリストテレスの方法は、合理的な手順を踏んでいると言える。

4. 不可謬主義と説得の文脈

説得という方法に関する上述の解釈に照らせば、相対主義と不可謬主義という

相容れない定式化がなぜ併存するのかという1節で提起した問題に、明確な解答を与えることができる。すなわち、説得という文脈においては、相対主義は不可謬主義と同一視できる。説得の方法は主張の帰結を無視して動機に着目するのであり、その観点からは相対主義と不可謬主義は区別できないからである。

Γ巻5章の不可謬主義批判は、特に二つの動機を標的とする。一つはいわゆる対立する現れの問題であり、もう一つは感覚の本性の捉え方である。対立する現れの問題とは、ある人にPであると現れ、別の人に¬Pであると現れるとき、そのどちらが真であるかを判断する基準が存在しないという問題を指す。

同様に、ある人々には、現れに関する「真理」も、感覚対象から来ている²⁰。というのも彼らは、真なることは多さによって判断することも少なさによって判断することも適切でなく、同じものが味わう人々に甘いと思われる一方、別の人々には苦いと思われる[...]と考えているから。さらに、他の動物の多くと私たちとは反対のこともどもが現れており²¹、また各人自身にも、その人自身に対して、つねに同じことどもが感覚に即して思われているわけではない[と考えている]。ゆえに、それらのうちどのようなものが真ないし偽であるかは明らかではない。(Metaph. Γ5, 1009a38-b10)

人間間、人間と動物の間、また同じ人の別々の感覚の間で感覚的な現れが対立することがあり、そのどちらが正しいかを決定する手段はない。不可謬主義者は、こうした決定不可能性から、対立する現れがいずれも真であると結論する。同種の議論は『テアイテトス』にも見られる(Thet. 152b-c; 154a; 158a-e)。

もとよりこの結論は、決定不可能性の論理的帰結ではなく、数ある蓋然的結論の一つにすぎない。例えばデモクリトスはここから反対に「何ごとも真ではない、あるいは少なくとも私たちには不明瞭である」(1009b11-12)と結論する²²。だが、どちらの結論も「感覚対象から来ている」点では同じである。決定不可能性が感覚的な現れの場合に顕著であるがゆえに、感覚対象一元論を採ることで、こうした極端な認識論的帰結が生じるのである。

不可謬主義のもう一つの動機は、思考と感覚の本性に関する誤った見解である。

総じて、感覚は思慮であり²³、感覚は変容である²⁴、と想定しているために、感覚に即して現れていることは必然的に真であると彼らは主張する。(Metaph. Γ5, 1009b12-15)

ここでは不可謬主義の動機となる二つの前提が語られる。第一に思考と感覚が同一であること、第二に感覚作用が感覚主体の変化にすぎないということである。これに対するアリストテレスの応答は以下の通りである。

「真理」については、現れの全てが真であるわけではない〔と述べる〕。それはまず、感覚は固有の事柄について偽であるわけでもないが²⁵、しかしファンタシアは感覚と同じものではないからである。(Metaph. Γ5, 1010b1-3)

感覚とファンタシアの区別が正確に言って何をどう解決しているのかという問題は『魂について』の解釈を巻き込む難問であり、本稿で立ち入ることはできない²⁶。さしあたり確認すべきは、アリストテレス自身の魂論に基づく認識能力の区別により、思考=現れ=感覚という単純な理解が排されていることである。そうした理解は感覚対象一元論の認識論的対応物であると同時に、『テアイテトス』で人間尺度説を論じる契機となった「知識とは感覚である」という定義にも対応する。

まとめると、不可謬主義は、現れの真偽の決定不可能性、および思考と感覚の同一視という二つの動機をもつ。そして3節で素描した通り、そのいずれも究極的には感覚対象一元論に動機づけられうる。これらの動機は、それ自体で成熟した哲学的見解であるというよりは、むしろ前理論的水準に位置する信念である。だが、哲学的主張が前理論的信念に支えられている限り、それに対する説得の方法は、主張の心理的基盤をなす当の水準まで降りてゆくことになる。

そして、以上いずれの動機も、相対主義と区別される不可謬主義に固有のものではない。前理論的水準において両者は動機を共有する。あるいは不可謬主義自体が相対主義の前理論的形態でさえありうる。したがって、不可謬主義に対する説得は、同時に相対主義に対する説得を構成する。この意味で、Γ巻5章で不可謬主義が論じられていることはなんら不思議ではない。相対主義が不可謬主義の洗練されたヴァージョンであることは、不可謬主義を論じるというアリストテレスの選択を疑わしくするどころか、そうした選択の理由そのものなのである。

5. 相対性と強制の文脈

説得の文脈において、相対主義は不可謬主義と同一視された。これに対して、強制の文脈においては、相対主義は矛盾主義と明瞭に区別され、相対性テーゼの

かたちで押さえられる。強制の文脈への転換はΓ巻6章において始まる。

だが、これらに説得されている人々のなかにも、これらの論を述べるだけの人々のなかにも、アポリアを立てる人々がいる。すなわち、健康な人を見分ける人が誰なのかを、また総じて各々のことについて正しく判断するだろう人を、この人たちは探求するのだ。[……] 私たちが述べた通りのことが、この人たちの蒙っている状態なのである。説明のないことの説明を探求しているのだから。というのも、論証の原理は論証でないからである。さて、この人々がこのことに説得されるのは容易であろう（というのも、受け入れるのは困難でないから）。他方、言論において強制力のみを求める人々は、不可能なことを探求している。ただちに反対のことを言いつつ、反対のことを言う権利があると考えているから。（*Metaph.* Γ6, 1011a3-16）

Γ巻5章は、決定不可能性の問題に対して、現実には私たちは現れの真偽を判定しているという常識に訴える（Γ5, 1010b3-30）。ここで登場するのはそれに対する懐疑論的反問であって、これは説得の対象と強制の対象となる人々のいずれからも問われうる。これに対するアリストテレスの再応答は簡潔である。すなわち、判定基準は原理であり論証できない（cf. Γ4, 1006a5-11; *APo.* 1.3）。

他方の「強制力のみを求める人々」に対する応答は解釈が分かれる。本稿は、この人々は矛盾主義者に属し、矛盾主義者が真理を探求できないという論点がここで反復されていると理解する（cf. Γ5, 1009b33-1010a1）。だが、(a)「(自分が) 反対のことを言う権利があると考えている」と訳した“ἐναντία γὰρ εἰπεῖν ἀξιοῦσιν”は、(b)「(相手に) 論駁を要求する」という意味にも理解できる²⁷。そして (b) の読みは、応答の対象が矛盾主義者でなく、あくまで矛盾の回避を目指す相対主義者だと理解する可能性を残す。McCready-Flora はこうした理解に立ち、この応答と、後に続く相対主義批判が同一文脈にあると考える²⁸。だが、この解釈は誤りである。相対性を導入した箇所直後では、次のように言われる。

それゆえ、議論において強制力を求めると同時に議論を引き受けるのが相応しいとする人々は、現れがあるのではなく、現れが現れている人にとって、現れるときに、そうある限り、そうある仕方であるのだということに用心すべきである。彼らが、議論を引き受けはするものの、そうは引き受けない場合、彼らはただちに反対の事柄を語ることになる。（*Metaph.* Γ6, 1011a21-25）

ここでアリストテレスは、同じ人のなかでも対立する現れが生じうるという先述の論点に基づき、主体相対性を細分化している。こうした相対化を要求する相手は「同時に (ἅμα δὲ καὶ) 議論を引き受けるのが相応しいとする人々」と呼ばれるが、ここには「強制力のみを (μόνον) 求める人々」との明瞭な対比が読み取れる。前者は相対主義者、後者は矛盾主義者と同定できる²⁹。このようにアリストテレスは、矛盾主義と相対主義を峻別した上で、以降は後者の批判に集中している。

そして、相対主義にのみ妥当する以降の批判は、相対主義に含まれる相対性テーゼの二つの形而上学的帰結を標的としている。一つは反実在論的帰結 (1011b4-7)、もう一つは関係カテゴリーの性格に由来する不条理な帰結である (1011b7-12)。したがってそれらの議論は、相対主義者に対する強制の議論として理解できる。

結論

アリストテレスは『形而上学』Γ 卷 5-6 章において、主張の心理的動機に着目する説得と、論理的帰結に着目する強制という二つの方法を意識的に区別して用いている。人間尺度説が不可謬主義として提示されていることは説得の文脈から説明でき、これを相対性に対する強制の文脈との対で捉えるなら、その全体を相対主義批判として理解することができる。本稿では以上のことを示した。

もとより Γ 卷の本題は無矛盾律であり、相対主義批判は傍論であって、相対主義が不可謬主義に還元される説得の文脈において本題に接するにすぎない。それだけに、論証戦略の周到さは説明を要するようと思われるかもしれない。だが本稿の解釈によれば、Γ 卷 6 章の要約部に見て取れるように、説得と強制は矛盾主義批判の方法でもあった。そしてすでに Γ 卷 4 章において、無矛盾律擁護が論点先取に陥らないための方法論的制約に注意が払われている (cf. Γ4, 1006a15-26)。同章で採用されたのは (帰結を批判する)「論駁的論証」の方法だが、同様の制約を満たす方法として説得が無矛盾律論に組み込まれるのは自然ななりゆきである。また、いったん説得と強制の対を主題に依存しない形で定式化し、矛盾主義と相対主義を同じ「説得」の議論で捉えたなら、相対主義に対する強制を補足することは、脱線的ではあるにせよ、脈絡を欠いているとは言えないだろう。

はじめに示唆したように、本稿の解釈は古代のプロタゴラス受容史の俯瞰的理解に一定の含意をもつ。『形而上学』Γ 卷の不可謬主義批判が相対主義批判の一部をなしているという結論は、当該箇所が『テアイテトス』の明白な影響下にある

ことと考え合わせるなら、『テアイテトス』に相対主義批判を読み込む主流派解釈に新たな傍証を与える。また本稿の解釈は、従来積極的意義を見いだされなかった不可謬主義批判を適切な脈絡に位置づけることで、主流派解釈を部分的に修正するとともに、定式化の変化の理由を説明する限りでは全体像を補強している。

なお本稿は、『形而上学』Γ巻5-6章の解釈としては、あくまで形式面の素描に留まる。これを踏まえた内容面の詳細な検討は、別稿に譲らなければならない。

¹ Cf. Burnyeat 1976a; 1976b. なお正確には、アリストテレスの人間尺度説に対する言及は『形而上学』Γ巻のほかΘ, I, および(真正性は疑わしいものの)K巻にも見られ、このうちI巻の定式化は上記の図式とさしあたり無関係である(cf. McCready-Flora 2015)。またMcCready-FloraはI巻のみが歴史的プロタゴラスの尺度説を扱っていると論じる。本稿はアリストテレスが表象するプロタゴラス像の史実性という論点には立ち入らない。

² Cf. Fine 2003. そのほか「主観主義」(Burnyeat 1976a; 1976b)「現象主義」(Zilioli 2013)などとも呼ばれる。

³ Cf. Burnyeat 1976a, 46.

⁴ Cf. Fine 2003.

⁵ 『形而上学』Γ巻のテキストからの引用はHecquet-Devienneの校訂版に基づく。

⁶ Cf. Burnyeat 1976a; Notomi 2013, 28-30.

⁷ Cf. Kirwan 1993, 113. Kirwan自身の解釈は議論の眼目を(誤って)相対主義の回避に置く。

⁸ Cf. Burnyeat 1976a, 46 n.3; Lee 2005, 61-62; Notomi 2013, 31; Zilioli 2013.

⁹ Cf. Notomi 2013, 31-33.

¹⁰ Ross, Cassin & Narcy, Kirwan 1993はἰσχύςを主語に取るが、Hecquet-Devienneはἐλεγχοςを主語に取る。本稿は後者に従う。語順上はるかに自然であり内容上も可能だからである。

¹¹ Cf. *Metaph.* Γ5 1009a30, b1, 11, 12, 15, 1010a10.

¹² 本稿の結論でも触れるように、この解釈に基づけば、Γ巻4章の議論も「強制」にあたる。McCready-Flora 2015, 106 n.63はこうした分類に疑念を呈し、4章の批判対象であるはずの無矛盾律の論証(ἀπόδειξις)を求める人々が、6章では「説得」を必要とする人々だとされていると主張する。だが、この懸念は、論駁的論証の相手である矛盾主義者と、狭義の論証(ἀπόδειξις)を求める人々の混同に基づいている。両者の区別に関しては5節を参照のこと。

¹³ 厳密には「信じる理由や主張する理由」と言うときの「理由」は両義的である。個人の認知状態とは独立に、ある命題Qが主張Pのよい根拠となる時、QはPの客観的理由と呼ぶ。これに対して、ある個人Aが実際にQを信じているためにPを信じる、あるいはPを主張するとき、QはPの(Aにとっての)主観的理由と呼ぶ。Pだと主張する人に対して-Pであると「説得」する際、直接の標的となるのは主観的理由である。ただし、批判者の側から主観的理由の特定を試みる場合には、(寛容の原理に基づき)客観的理由を主観的理由の候補とすることになる。特に、アリストテレスとプロタゴラスの場合にそうであるように、本人から主観的理由について言質を取ることを望めないときには、こちらの方法を探らざるを得ない。『テアイテトス』のソクラテスは既にこの点について方法論的意識を明確にしている(cf. *Th.* 169d-e, 171c-d)。

¹⁴ (4)の哲学の不可能性の論点は例外的に帰結に言及するが、これは脱線の議論とみなせる。

¹⁵ Cassin & Narcy, 241; Kirwan 1993, 109; Wedin 2004, 229-230.

¹⁶ Cf. Lee 2005, 131.

¹⁷ Γ巻5章に見られる『テアイテトス』の直接・間接の引証については既に多くの研究がある。Cf. Cassin & Narcy, introduction; Lee 2005, chap.7; Zilioli 2013; McCready-Flora 2015.

¹⁸ Zilioli 2013は感覚対象一元論をテアイテトスの第一定義と同一視している。しかし、『形而上学』Γ巻の理論的関心が知識論ではなく存在論的原理としての無矛盾律にあり、この関心の違いが定式化の違いの背景にあることは見逃されるべきではない。

- ¹⁹ Goldin 2013 がこうした解釈をより詳細に擁護し、その認識論的含意を吟味している。
- ²⁰ この箇所の「真理」は現れ自体の真理性の意味にも理解できるが (cf. Ross, 275; Kirwan 1993, 17; Cassin & Narcy, 143)、Cassin & Narcy が注で示唆するように (Cassin & Narcy, 232)、同時にプロタゴラスの著作名にも暗に言及していると考えられる。後の「真理」については (1010b1) という表現も同様である (Lee 2005, 24; McCready-Flora 2015, 97-98)。
- ²¹ Cassin & Narcy, Hecquet-Devienne に従い E, J 写本に基づいて読む。
- ²² ただしアリストテレスの叙述の力点はプロタゴラスとデモクリトスの立場の対立にはない。むしろ両者は総論的には立場を共有する (*Metaph.* Γ5, 1009b15-31; cf. *de An.* 1.2, 404a27-30)。
- ²³ 「思慮」(φρόνησις) はここでは狭義の知識のみならず思考作用一般を指すと理解する。語自体に叙実的な含みがないことは後のホメロスの例 (1009b28-31) などから明らかである。
- ²⁴ 「変容」(ἀλλοίωσις) はここでは性質カテゴリーに限られない変化一般を指す。
- ²⁵ Ross, Jaeger の修正を採らず、Cassin & Narcy, Hecquet-Devienne に従い E, J 写本に基づいて読む。固有感覚の不可謬性へのコミットメントを読み取れるか否かが内容上の相違点となる。
- ²⁶ Caston 1996 がこの問題について特に啓発的である。また Lee 2005, chap.7 も参照のこと。
- ²⁷ Cf. (a): Ross, Cassin-Narcy; (b): Kirwan 1993, Hecquet-Devienne, McCready-Flora 2015.
- ²⁸ McCready-Flora 2015, 106-114.
- ²⁹ Cf. Cassin & Narcy, 48-49.

[参考文献]

『形而上学』校訂本の引用は年号表記を省いた。

- Burnyeat, Myles F. 1976a. "Protagoras and Self-Refutation in Later Greek Philosophy," *The Philosophical Review* 85(1), 44-69; reprinted in Burnyeat 2012, 3-26.
- Burnyeat, Myles F. 1976b. "Protagoras and Self-Refutation in Plato's *Theaetetus*," *The Philosophical Review* 85(2), 172-195; reprinted in Burnyeat 2012, 27-47.
- Burnyeat, Myles F. 2012. *Explorations in Ancient and Modern Philosophy*, Vol.1, Cambridge University Press.
- Cassin, Barbara & Narcy, Michel. 1989. *La décision du sens*, Vrin.
- Caston, Victor. 1996. "Why Aristotle Needs Imagination," *Phronesis* 41(1), 20-55.
- Fine, Gail. 2003. *Plato on Knowledge and Forms*, Oxford University Press.
- Goldin, Owen. 2013. "Circular Justification and Explanation in Aristotle," *Phronesis* 58(3), 195-214.
- Hecquet-Devienne, Myriam. 2008. "Introduction, texte grec et traduction," in Hecquet-Devienne, Myriam & Stevens, Annick. 2008. (eds.) *Aristote, Métaphysique Gamma*, Peeters.
- Jaeger, Werner. 1957. *Aristotelis Metaphysica*, Oxford University Press.
- Kirwan, Christopher. 1993. *Aristotle Metaphysics Books Γ, Δ, and E*, 2nd ed., Oxford University Press.
- Lee, Mi-Kyoung. 2005. *Epistemology after Protagoras*, Oxford University Press.
- McCready-Flora, Ian. 2015. "Protagoras and Plato in Aristotle" *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 49, 71-127.
- Notomi, Noburu. 2013. "A Protagonist of the Sophistic Movement? Protagoras in Historiography," in van Ophuijsen et al. (eds.) 2013, 11-36.
- Ross, W. D. 1924. *Aristotle Metaphysics*, Vol.1, Oxford University Press.
- Ross, W. D. 1956. *Aristotelis de anima*. Oxford University Press.
- Ross, W. D. 1964. *Aristotelis analytica priora et posteriora*. praefatione et appendice avxit L. Minio-Paluello. Oxford University Press.
- van Ophuijsen, Johannes M., van Raalte, Marlein & Stork, Peter (eds.). 2013. *Protagoras of Abdera: The Man, His Measure*, Brill.
- Wedin, Michael V. 2004. "On the Use and Abuse of Non-Contradiction," *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 26, 213-239.
- Zilioli, Ugo. 2013. "Protagoras through Plato and Aristotle," in van Ophuijsen et al. (eds.) 2013, 233-258.